

ういいいいいいいいいいいいいん……、がこん。

——不快な音がする。

エレベータが動いている。停まったのだろうか。扉は今開かれようとしている。漠然とした不安のみが胸に渦巻いていた。

そもその始まりは、停電だった。午前二時を一分ほど過ぎたあたりだった。おれは眠い目をこすりながら、たまたま手元にあった短編推理小説を読んでいた。その短編集の最後の話を読んでいる最中——まさに主人公たちが暗闇に包まれたそのとき——おそらく、かなり大規模の停電であったのだろう。一瞬のうちに守衛室は闇に包まれた。だが、時代の進歩というものはめまぐるしいもので（その範疇には入らないかもしれないが）非常用の電源はすぐに作動した。この場合マンション「コーポ」フオーモス」では管理人室、守衛室のある一階と、エレベータの二つに非常用電源がまかなわれる。個室の電気が復旧するのは完全に電力供給が回復してからだ。どんな場合であってもエレベータは動く。ひとたびエレベータに閉じ込められてしまえばどう足掻いても抜け出せないからだ。一階は防犯上の問題と、住民からの苦情を受け付けるため（いつの時代でも文句をいうだけの無能はいて、それともかなりの数ときているから困ったものだ）だけに非常用電源から供給されている。そのときも例に倣って一階の電気はすぐに点くはずだった。それを確認してから、相手である木田は、マニュアル通りに管理人のところへと向かうはずだった。だが、電気は復旧したはずなのに、相変わらず守衛室は暗闇に包まれていた。テレビも電源は入っている。だが、画面は黒い。テレビは音だけで停電の緊急速報を伝えている。画面が故障でもしたのか、画面だけが映らない。蛍光灯も、点かない。昏い部屋の中に、映らないテレビの発する音声が続いている。その奇妙な空間の中でおれも木田も押し黙った。

テレビによると（テレビ局もご多分に漏れず非常用電源で動いてはいるようだ）どうやら予想通りのかなり大規模の停電らしい。首都圏周辺を巻き込む大停電で、原因はまだ不明だそうだ。電力供給がストップすると危険な場所、例えば病院などは非常用電源が配備

されているから、大停電といっても、そう深刻な事態にはならないだろう。ただ、何故かこの部屋の明かりがまったく壊滅していること以外は。おれは大きな伸びをした。暗闇とはいえど、窓から洩れる青白い月明かりがあるので、まったく見えないというほどでもない。おれは木田に指示して、管理人のところへ行かせた。明かりが点かないことを除けばこれはただの停電に過ぎない。

おれは、懐中電灯を手を取った。……これも点かない。明かりという明かりがどれも使用不能の状態にある。部屋の中を色々と漁ってみたが、照明器具以外はどれも普通に動いている。——なにか腑に落ちない。おれがさらに戸棚の中を手探りで漁ってみると、なにか箱のようなものを掴んだ。振ってみると、太いマッチでも入っているかのような音がする。不審に思ったので窓のそばまで来て月明かりに照らしてみると、それが蠟燭の入った箱であることがわかった。

近頃、蠟燭というものをあまり眼にしていない。最後に見たのは、十年程前に、祖母の墓参りに行ったときだったような気がする。幾分かの懐かしみを持って、おれは持っていたライターで蠟燭に火を点けた。オレンジ色の頼りなげな明かりが部屋を照らす。当然といえば当然なのだが、ごく当たり前に明かりが点いたことが嬉しく思えた。時計を見る。それから十分もしないうちに、耳障りな電子音が響いた。エレベータだ。エレベータの中にある通話ボタン（とでもいいえいいのか）を押したときに鳴る電子音だった。おかしい。エレベータの電力は、もう復旧しているはずなのだが。旧式の受話器の形をした通話機を手を取った。

「こちら、守衛室。どうしましたか。どうぞ」

相手はパニックに陥っているらしく、早口で喚いた。

「…ザザ…助けて…ザザ…れ！ ハメラ…ザ…たんだ！ 閉じ込められた！」

エレベータが止まったのか。だが、途中に雑音が混ざってよく聞こえない。

「落ち着いて。何処で止まったのわかりますか？ 冷静にお願いします。どうぞ」

すこし男の息が落ち着いた。

「…ザザ…地…ザザ…下だ。一階…ザザ…下一階の間だ。助…ザザ…てくれ！ 変な…ザザ…き…ザザ…んだ！」

地下だと？ なにを好んでこんな時間に地下の物置なんか使うんだ？

「もしもし、聞こえますか？ 大変不躰ですが…どうしてこんな時間に地下へ向かったんですか？」

中年男の情けない声が響いた。

「わか…ザザ…ん。とにかく…ザザ…騙され…ザザ…んだ。俺がエレベ…ザザ…タに乗り込んだとた…ザザ…いきなりドア…ザザ…閉まって動き出し…ザザ…わけがわからん」

乗り込んだとたんにドアが閉まって動き出した？ エレベータが壊れたのか？

「とにかく、落ち着いてください。今、会社に連絡しますので、そうすればすぐに助け出されると思います」

男が安心したのか、深い溜息が聞こえた。男が話しかけてきた。マニュアルによれば、会社への電話は閉じ込められた人間が落ち着いてからでなくてはならない。閉所でのパニックで「おかしく」なることがあるから、らしい。男の声が聞こえた。妙に馴れ馴れしい声だ。雑音は消えていた。

「なあ…これはさっきの停電に関係があることだと思うか？」

唐突の質問におれは戸惑った。

「さあ…私にはわかりかねますが」

男は考え込むような口調で続けた。

「この停電でエレベータの中身がおかしくなっちゃったのかもな。ひよっとすると、この世界自体が狂ってきたのかもしれない。どう思う？」

この男、既におかしくなってしまったのだろうか。

「非常用電源がいきなり停電になるってことはあるのか？ それともなにかおかしい歪みなんかが存在するのか？ 俺は不安なんだよ。なあ、答えてくれ！」

狂っているのか、この男は。歪みだと？

「なあ、答えてくれよ。なあ。あつ……」

男の声が不意に途切れた。不安がよぎる。

「どうしました？ なにがありました？」

「いや、あ、動いた。動いてるよ！ ゆっくりだが。うん。動いた！ 動いてる！」

エレベータが動き出したようだ。やれやれだ。しかしこれから報告用にあの男から事情を訊いておかねばならないのだ。まったく面倒な。おれは受話器を置くと、エレベータの前へと急いだ。エレベータは、停止状態から復旧したあと、すぐに一階へと向かうようになっている。あの男が他の階に行こうとしても、一階で必ず停止するのだからその顔は拝めるだろう。ういいいん、とエレベータが動いている音がする。このエレベータはプライバシー保護（だと聞いているが、どうだろう）のために、エレベータの中は覗けない

ようになっていて。だから、動いているかどうかは音で判断するしかない。

音が止まった。

ドアがゆっくりと開く。おれはエレベータの中に目を遣った。エレベータの内部の明かりは何故か点いていた。それがひどく禍々しいなにかの象徴のように思えたが、どうしてそう思ったかはわからない。あれ……、いない？

その中にいるはずの男はいなかった。エレベータには誰一人乗っていない。おれは自分の目を疑った。そんなはずはない。おれは確かにあの声を聞いた。あの不安そうな中年男の声。錯覚だったのか？ 違う。おれは確かに聞いたのだ。

救いを求めるようにおれは一歩足を踏み出した。いったい何処に消えたのだ？ 隠れるような場所はない。完全に空だ。いったい何処へ……

その瞬間だった。音もなく背後の扉が閉まった。おれは自分の不覚に気付いた。

——しまった、ハメられた！

もう遅かった。エレベータは至極ゆっくり降下し始めた。一階の下は地下一階しかない。その途中で、エレベータは、がこん、という音を立てて止まった。そして、エレベータ内の照明は消えた。階数表示も消えた。閉じ込められた。

停電？ いや、非常用の電源が切れたなんて有り得ない。だいいちに二度も続けて停電が起こるなんて有り得ないのだ。じゃあ、あの中年男の声はなんだったのか。あの通話はここからしかできないはずだぞ。この中にいないとすると、いったい何処から話しかけてきたんだ？ 頭が混乱する。エレベータの中は完全な暗闇だ。まるで意識が闇に吸い込まれたような錯覚。ふと、なにも見えない中で自分のポケットをまさぐってみた。漠然たる希望だったが、それも徒労に終わった。携帯電話は上に置き忘れてしまっていた。

「畜生……！」

連絡手段は完全に絶たれたのだ。暗闇の中におれはへたり込んだ。現在の状況は既におれの手を離れている。今、おれには黙って座っていることしかできない。それにしてもあの中年男はいったいなんだったんだ？ おれを騙すための罠？ だがそんなことになんかの必要性がある？ 無数のクエスチョンマークがおれの脳裡を駆け巡っていた。考えれば考えるほど薄ら寒くなってくる。どう考えても必然性がない。確かにおれはあの中年男の声を聞いた。それは間違いない。しかし、何故あの男は消えてしまっていたのか。

それからおれは暗闇の中、三分間ほど沈思考した。それから、おれはライターで明か

りを点け、時計を見た。機能がついていると、こういうときに便利だ。二時五分。秒針は一秒一秒正確に時を刻み続け、おれは黙ってそれを見つめていた。

もしかしたら――あの男は嘘を言っていたのではないだろうか。実はエレベータが止まっていなかったとしたら。実は、エレベータは復旧していたのではないか。男は、時間を見計らっておれがちやうど気を抜いた瞬間に、通話ボタンを押していたとしたら。復旧した直後に一階戻ってきていても、「閉」ボタンを押せば、おれに見られずに他階に移動できるかもしれない。そして、比較的近い二階、もしくは地下一階から通話ボタン押す。そして頃合いを見計らって、動き出した振りをする。あとは一階のボタンを押してエレベータから降りれば無人のエレベータは完成する。できないことはない。だが、やはり必然性がない。だいいち、停電は、まったく偶発的な出来事だったはずだ。それを予想してでもないなければこんなことはできるはずもない。しかし、停電してから思いついたことでもあるまい。停電がいつか起こるのを待ち構えていたというなら話は別だが。でもそれではいささか偏執狂的過ぎる。

いつそ幽霊の仕業であればどんなに楽だろう。幽霊であれば。だが、現象が中途半端なのだ。確かにこれが幽霊の仕業であれば、一種の気休めにはなるだろう。しかし、おれはこのマンションの守衛を、五年も勤め上げているのだ。その間に幽霊を見たなんて話など聞いたこともない。幽霊が出るには条件が揃っていないだろう。まず、幽霊を目撃するのは必ず新入りと相場が決まっている。五年というのが中途半端過ぎるのだ。この築五年のマンションに怨念、生霊の入り込む余地はない。勿論おれにも原因となるべきことはまったくない。この現象が幽霊の仕業とはどうしても考えにくい。幽霊とは、先に条件が存在し、あとから理由と現象がついてくるものなのだ。このマンションは、まったくその条件を満たしていない。何処かの部屋で人が殺されてその怨念が漂っているとしても、それが現れるのはやはり六年かそれ以降でなければならぬ。

だからといって、人間の仕業と考えるのも都合が悪い。自慢じゃないが、おれには人付き合いといえるものがまったくない。付き合いがないのだから、他人にうらまれる理由は多分ない。それにおれはちゃんと生ゴミは火曜日出しているし、割り当てられる清掃の仕事もきちんとこなしている。収入は低いが、養うべき家族もいないのでそれに問題もない。誰かと言いつ争った記憶もここ数十年、まったくない。怨恨の線は考えられない。

理由がないとなると、さらにわけがわからなくなる。停電が起こると前もってわかっていなかった限り、この計画は成立しない。もしこれが停電という現象をなしに行われたと

したら、信憑性がまるでない。やはりこれは、停電、もしくはそれに類する災害のようなものがなければ成立しないのだ。それに、どう考えても停電後に偶然思いついたということとは有り得ない。つまり――

停電が起こるのを息を潜めて待ち構えていたのか。

なにか、なにかがおかしい。なにかがおかしい。歪んでいる。歪み始めている。そんなことは有り得ないのだ。そんな、停電が起こるのを待つなんて、有り得ない。誰にも予測できないことを、人間以上の存在のようなことが、できるはずがない。

世界は、歪んでしまった。その歪みはもはや取り返しもつかない。停電は、その合図だったのだ。もうおれにはわからない。考える気力もない。おれの意識は救いのない闇へと融けていく。

――ひよつとして。

おれは、薄れた意識の中で考える。

――あれはつまり、おれの妄想ではなかったのだろうか。

暗闇の中で思考がゆれる。

――おれは理由が欲しかったのではないだろうか？

意識は限りなく薄れている。

――この理不尽な状況に対する、理由。

暗闇の中で自問自答しながら。

――それならなにもかも説明がつく。

おれが閉じ込められたのは事実だ。停電が起こったことも、また。

だが、本当は、おれはなんの理由もなく閉じ込められたのではないだろうか。ただ、なんの気なしにエレベータに乗り、地下へ行く途中で閉じ込められた。もしかしたら、おれはこの格好のまま、既に何時間もここにいるのではないだろうか。その間に夢を見ていたとしても不思議はない。つまり、中年男の声などは、おれの覚え違いではないのか。おれは、夢で見た内容をそのまま現実と取り違えてしまったのではないだろうか。そう考えれば辻褄は合う。要するに、そんな中年男は何処にもいなかったのだろう。中年男はおれの

頭が作り出した架空の存在に違いがないのだ。そう考えると、幾分か気が楽になった。時間が気になった。さて、どれくらい時間がたったのだろうか。おれは明かりを点けるべく、左手を上げた。その瞬間だった。

ちかつ、ちかつ、と音がして、蛍光灯が点滅した。それから一瞬、点滅が止まる。それからすぐに蛍光灯が点いた。エレベーターの中は光に包まれた。何分間か、ひよつとして何時間ぶりの明かりは眩しかった。おれは、一種の安堵と一抹の不安を胸に抱いた。電力が復旧した場合、エレベーターはまず、一階を目指す。おそらく、そろそろ上に昇るのだろう。おれはエレベーターが動き出すのを辛抱強く待った。だが、何分たってもエレベーターは動き出さなかった。

ふと、奇妙な疑問が浮かんだ。

——今、このドアの外にはなにが広がっているのだろうか。

常識的に考えるならば壁しか存在していないだろう。縦穴としてのエレベーターの壁のみしか。だがこのエレベーターは何処で止まったのだ？ 一階と地下一階のちょうど中間ではなかっただろうか？ 地下一階というのは概念的に考えればマイナス一階ではないのか。つまり一階と地下一階とのちょうど中間は、存在するはずのない零階ではないのか？ もししかするとこの自動扉の向こうには人知を超えた零の世界が広がっているのではないか。

——馬鹿馬鹿しい。

いや、確かに馬鹿馬鹿しい考えだ。零階など造られていないのだから存在しているはずもない。そう、常識的に考えればその通りなのだ。しかし現にこのエレベーターはここに停まっている。即ち今、眼前にある「開」のボタンを押しさえすれば、この扉は忠実に開くのではないだろうか。

その瞬間から、「開」のボタンは妖しい誘惑の輝きを帯び始めた。

すべては、指一本だけで確認することができる。おれが力をすこしこの指にこめただけで確認することができるのだ。待っているのは、失望。いや、自分の愚かさだけだろう。だが、おれには押すことができない。

もし、もし本当に零階というものが存在したら？ そんなものは存在するはずはないだろうが、もし本当に存在していたとしたらどうする？ 一種それは子供じみた考えだった。頭では幽霊が存在しないことはわかっていても、ふと後ろが気になる。もし、実は幽

霊が本当にいたら？　とでもいうような。存在することを証明することは簡単だ。幽霊が本当に存在していたとしたら、存在していることが即ち存在証明なのだから。だが、いなことを証明することは恐ろしく難題であろう。そしてそれが証明されない限り、不安が拭われることはない。不安は残るのだ。もし、人物Aがとあることを知らないと言言しても、Aが嘘をついていないとも限らない。人間は本質的に信用ということができない生き物なのだ。つまり、零階というものは存在していないのだが、存在し得ないということではない。零階というものが存在してもいいのではないか。

おれは、「開」のボタンを見遣った。押しさえすればすぐにでも扉が開きそうな――何故ならこのエレベータは停止しているのだから。エレベータは、停止した階で扉を開けるのだ。今ここで扉が開いてなんの問題があるというのだ。停止した限りはエレベータの扉は開かれねばならない。鍵は眼の前にある。ボタンを押しさえすれば、扉は開くに違いない。その結果がたとえ失望だとしても臆することはないのだ。たとえ眼前に冷たい壁しか存在しなくとも扉は開かれるべきだ。

まるで、小説の登場人物がするような根拠のない確信だった。ボタンを押しさえすれば扉は開かれる。そう、まさにたったの一押しで零への世界が開かれるのだ。熱に浮かされたような、零への妄執とでもいうべき狂信がおれの身を包んでいた。

おれは小さな頃から零という言葉に深い関心を寄せていた。零。概念としてしか存在しないその言葉がおれを夢中にしたのだ。うまくわからない、掴み所のない零^{ぜろ}、その概念。零個の林檎は零個の蜜柑と等しい。その不思議がおれを捕らえて話さなかった。その答えは今、目前にあるのではないのか。本当の零が待っているのだ。錯覚かもしれない。どちらにせよおれの頭のネジは外れてしまったに違いない。好奇心こそがおれを動かす唯一にして最大の原動力だった。

おれはひとしきり躊躇^{ためら}ったあと、ボタンを押した。そこから先、時間はひどくゆっくりと動いた。

最初は、なにも起こらないと思った。事実エレベータが動くにはそれなりの時間がかかった。しばらくして、エレベータの階数表示がちかちかと点滅した。

階数表示の表示が消えた。停電かとも思ったがそうではなかった。

蛍光灯もちかちかと点滅した。

しかしすこしすると元に戻った。

なにか――複雑な機械が動くような――物音がした。

そして――そして自動扉が動き始めた。
ゆっくり、ゆっくり開いていく。

そこでおれはふと不安に駆られた。いいようのない不安だった。

それでも扉は開いていく。

おれは目を瞑^{つむ}った。不安のせいだ。

そして、完全に扉が開いて、おれは目を開けた。

そこにはなにもなかった。

本当になにもなかった。おれにもそれがまさしくなにもないとわかった。

そこにはなにも無かった。光も、音も、なにも存在していなかった。

ただエレベータの外は漆黒に塗り潰されていた。おれにはその中でなにかが蠢^{うご}いているのがかろうじてわかるに過ぎなかった。

おれはしばらく茫然自失していた。これが零階か。

おれが我に返ったのは、その闇に蠢^{うご}くなにかがエレベータの中に入ろうとしていることに気付いたときだった。

おれは操作盤に飛びつくと、震える指で「閉」ボタンを押し続けた。
時間は至極ゆっくりしていた。

扉が完全に閉まるまで何時間もかかった気がした。

――そして扉は閉まった。

あれはいったいなんだったのか。

おれは見てはいけないものを見てしまったような気がした。零階は零の世界ではなく、闇に蠢^{うご}く者たちの世界だったのだ。そう、まさしくこれは畏^{おそ}いだったのだ。おれを誘い込むための。とにかく怖^{おそ}かった。おれは夢中で「通話」ボタンを押し続けた。どうして気付かなかったのだろう。電気が点いているのなら守衛室に連絡がつくというのに。

「木田！ 助けてくれ！ おれだ！ 木田！」

向こうで受話器を取る音が聞こえた。冷たい声で木田が言った。

「こちら、守衛室。どうしましたか。どうぞ」

おれは声の限り叫んだ。

「木田！ 助けてくれ！ ハメられたんだ！」

扉の外ではピチャピチャと気色の悪い音がしている。

「落ち着いて。何処で止まったのわかりますか？ 冷静にお願いします。どうぞ」

おれは呼吸を整えてから、言った。

「……地下、地下だ。一階と地下一階の間だ。助けてくれ！ 変な生き物がいるんだ！」
扉の外ではなおもおどましい音が続いている。なにかを嘗めるような音は、今度は巨大なナメクジが這いずるようなずるずるとした大きな音にと変わった。

「もしもし、聞こえますか？ 大変不躰ですが……どうしてこんな時間に地下へ向かったんですか？」

木田はあくまで冷静だった。その冷静さが、気に障った。

「わからん。とにかく騙されたんだ。おれがエレベータに乗り込んだとたんいきなりドアが閉まって動き出したんだ。わけがわからん」

音はずるずるとなにかを引きずるような音から、まるで何十人も人間がドアを叩いているような音に変わった。背筋に冷や汗が走った。

「とにかく、落ち着いてください。今、会社に連絡しますので、そうすればすぐに助け出されると思います」

落ち着けだど？ こんな状態で落ち着いていられるか！

音がエレベータ内に響くのはさながら阿鼻叫喚のような有様だった。音だけの地獄にこれは今にも発狂しそうだ。

——と、音がやんだ。唐突に音は途絶えた。まるで悪い夢でも見ていたかのようにあとには静寂しか残らなかった。——夢？ そんなはずはない。いや、悪夢は確かに終息したのではないか。嫌な気配は既に去っていた。

安心して、おれは深い溜息をひとつ吐くと、受話器の向こうにいるであろう木田に話しかけた。

「なあ……これはさっきの停電に関係があることだと思うか？」

木田はおれの質問に戸惑ったようだ。

「さあ……私にはわかりかねますが」

木田はこういう男なのだ。

おれは考え込んだ。どうしてこんな不可解なことが起こったのだろう。その疑問を木田にぶつけた。

「この停電でエレベータの中身がおかしくなっちゃったのかもな。ひよっとすると、この世界自体が狂ってきたのかもしれない。どう思う？」

木田の答えはない。おれは急に不安になった。もしかして、この通話もなにかの罠ではないのか？ おれは不安を振り払うようにまくしたてた。

「非常用電源がいきなり停電になるってことはあるのか？ それともなにかおかしい歪みなんかが存在するのか？ おれは不安なんだよ。なあ、答えてくれ！」

答えはない。おれの不安は最高潮に達しようとしていた。

「なあ、答えてくれよ。なあ。あつ……」

その瞬間だった。不意に重力が増したような感覚を体感じた。ひどくゆっくりだが、エレベータが動き出したのだ！ そのおれの様子を察して、木田が問いかけてきた。

「どうしました？ 何がありました？」

おれは安堵と興奮に包まれながら答えた。

「いや、あ、動いた。動いてるよ！ ゆっくりだが。うん。動いた！ 動いてる！」

それに対して、木田の言葉は妙に含みがあった。

「そうですか……良かったですね」

木田が受話器を置いた音が聞こえた。

変な言葉だった。なにか妙に引かかる。それに……受話器を置く前に、木田の囁い声が聞こえた。まるでなにかが蠢いているような――

錯覚だ。おれは気にしないことに決めた。いずれにせよ、もうすぐおれは助かるのだ。

うiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiん……、がこん。

エレベータが停まった。そして、至極ゆっくり扉が開き始めた。

扉が開いた。

………おや？

扉の向こうには誰もいなかった。がらんとした空間だけがそこに広がっていた。おれは確かに話していたのだから、いないはずがない。おれはふと、奇妙な感覚に囚われた。

これは、何処かで……

わけがわからなかった。奴はここに来るまでの間に消えてしまったのか？ 蒸発？

これだけわずかの時間に何処に行けるというのだ。なにかを確かめるように、おれはエ

エレベータの階数表示を見遣る。ここはまぎれようもなく一階だ。エレベータが別の階に停止したわけではない。エレベータの階数表示も一階を示している。守衛室に目を遣る。木田はいない。守衛室には誰もいない。電気が点いているだけだ。世界がおれひとりになってしまったような感覚がした。

無意識のうちにおれは足を一步踏み出し、扉へと近付いた。

もう、なにもかもが混乱していた。

そのままおれは救いを求めるようにエレベータへと足を踏み入れていた。

時計は、午前二時を指していた。

(了)